

第17話 新田義貞と北畠顕家

北国に下った新田義貞と奥州の北畠顕家とが京都の回復を企てるが、
 いづれもその作戦が成功せずに戦死する。二人が死んで官軍の勢いが衰えると、
 尊氏は光明院から征夷大將軍に任ぜられて幕府を京都に開く。

木目峠の風雲

これより先、新田義貞は皇太子である恒良親王と尊良親王を奉じて叡山の行在所を出発し、琵琶湖の西岸を北に進んで越前の敦賀に向おうとしたが、既に尊氏の武將の斯波高経が途中の要害で迎え撃つとうとしていたので、急に道を替えて遙かに遠くの木目峠を越えました。10月の半ばの事で、今の太陽暦では12月の初めに当る。すでに北国の高い山々には雪が降って、麓には時雨の止む時がなかつた。その中を冒して進軍を続けるが、峠を越す頃には殊に寒さが烈しく、凍え死んだ士卒もあつたくらいです。

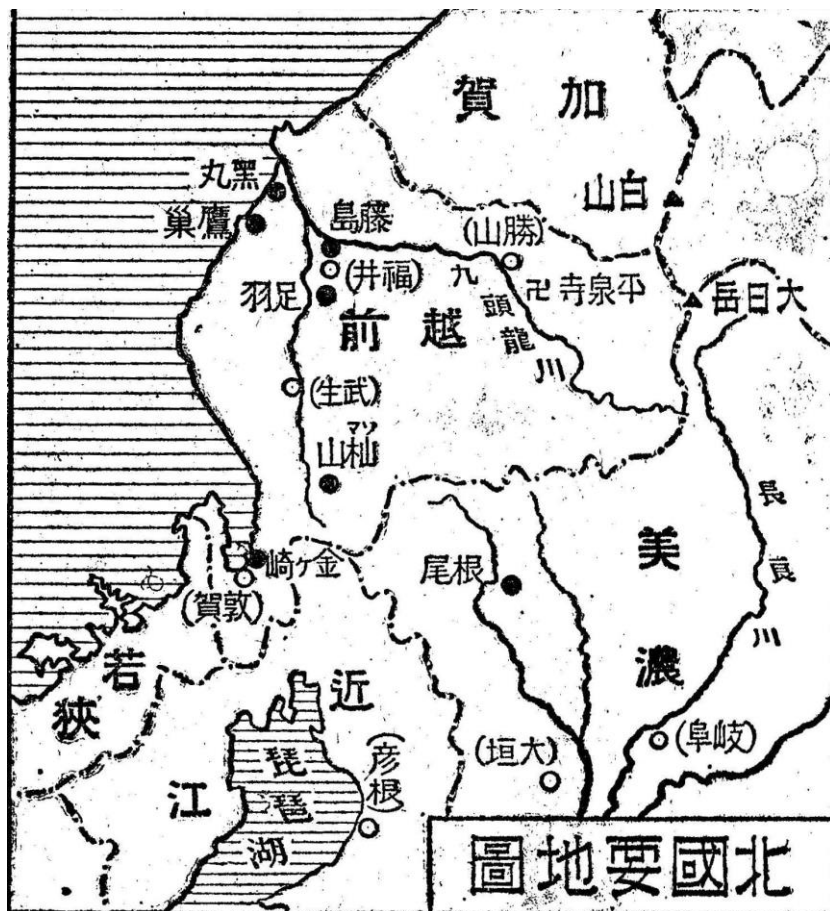
この時、伊予の土居、得能の一族は300余騎で義貞に従っていたが、雪道に踏み迷つて本軍に遅れたところに、足利勢のために俄かに襲撃されて、戦おうにも馬は雪に凍えて進まず、兵士は指がかじかんで弓を引くこともできなかつたので、やむなく腰の刀を土に立てて、その上に俯伏せに貫かれて死んだと伝えられている。いかにこの進軍が困難を極めたかが想像されます。

義貞、金崎城に入る

こうして義貞らは辛くも敦賀に着いた。氣比の大宮司の氣比氏治という人がこの地の勤王家で、直ぐに300騎を率いて皇太子を迎えに参り、義貞の軍を金崎城に入れた。

柚山城

しかし、このひとつの城に立て籠もつていたのでは、迎も官軍が勢力を張る事が出来そうになかつたので、新田義貞は更に大いに勤王の兵を集めるために、子の義顕を遠く越後に下して、弟の脇屋義助を柚山城に遣わすことにした。



柚山城は敦賀の東北で凡そ40km位の山中に在って、北国街道に沿った要地です。義助と義顕とが数千の兵を率いて先づその地に到ると、城主の瓜生保および弟の僧の義鑑らは喜んでこれを迎え、義

第17話 新田義貞と北畠顕家

すけ よしはる たいしょう あお ぎへい あ かんぐん おう
助の子の義治がその時13才になるのを大将に仰いで、義兵を挙げて官軍に応ずることにしました。

しゅじゅうわづ き
主従僅かに16騎

それで、新田義貞は更に越後に向おうとしていたが、この時、たまたま金崎城が斯波高経の率いる20,000余騎の賊軍に攻め立てられているという知らせが伝わって来ると、その評判に恐れたのか、義貞らの兵の多くは続々と逃げ去って、後にはいくらかも残らなくなった。

それで、よんどころなく、義貞は義助と共に金崎に引き返したが、城の近くまで来た時には主従僅かに16騎になってしまっていた。何という情けないことだったでしょう。十重二十重に取巻いた敵陣の中を、どうしてこの小勢で破って通れるか？

よしすけ みょうけい
義助らの妙計

16人の者は相談して、ついに一つの計略を考えだしました。彼らはその鉢巻と上帯とを解いて、青竹の先に結び付けて旗のように見せかけたのを、そここの木の梢や物陰などに立てて、夜明けのまだ薄暗いうちに敵陣の後ろに駆け出で、「北国の武士や僧兵共が20,000余騎で官軍を援けに駆けつけたぞ」と声々に叫んで鬨の声を挙げながら、大勢の中に破って入った。寄手は、てっきり柚山の援兵が来たものと思って驚いて囲みを解いて退くところを、城中からも打って出たので、寄手は後から身方の行くのも敵の追うものと思違いして、どこまでも逃げた。

こうして金崎の囲みは難なく解けて、16騎は無事に入城しました。

ぞくぐん ふたた かながさきじょう かこ
賊軍、再び金崎城を囲む

足利尊氏は京都でこれを聞いて大いに怒り、直ちに諸将らに命じて再び金崎城を囲ませた。主将は斯波高経でしたが、新たに高師泰以下の諸将を京都から進発させた。その軍勢は60,000余騎でした。しかし、この金崎城の三方は海で岸が高く、東南の一方だけは山に続いているが、その山と城との間には深い谷があって、その岸もまた絶壁をなしていたので、寄手の大軍も近づくことが出来なかった。

よしのちやうてい おつかい
吉野朝廷の御使

ある朝、穏やかに風いだ海の上を、西の方の櫛川の島崎というところから、金崎を指して泳いで来る者がある。敵か身方か、それとも海人かと見ていると、巨理新左衛門という者が吉野の朝廷からのお使いとして来たのです。見れば、詔を髻に結びつけている。城中の人々は驚いて、急いで開いて見ると、天皇が潜かに吉野に遷られて、近国の官軍が悉く馳せ集まったので、近いうちに京都を攻める事にする旨が記されていた。それだと、諸国に官軍が起こって、ここへの援兵もやがて来るであろうと、人々は大いに喜んだ。

うり うたもつきやうだい せん し
瓜生保兄弟らの戦死

この事を知った寄手の方では、この上は一刻も早く攻め落さなければなるまいと、延元2年正月の頃

からその囲みをいよいよ**嚴重**にした。このために城内の糧食は次第に乏しくなり始めた。柚山の脇屋義治はこれを聞いて大いに案じ、瓜生保、僧の義鑑らに金崎を救わせたが、運悪く途中で高師泰

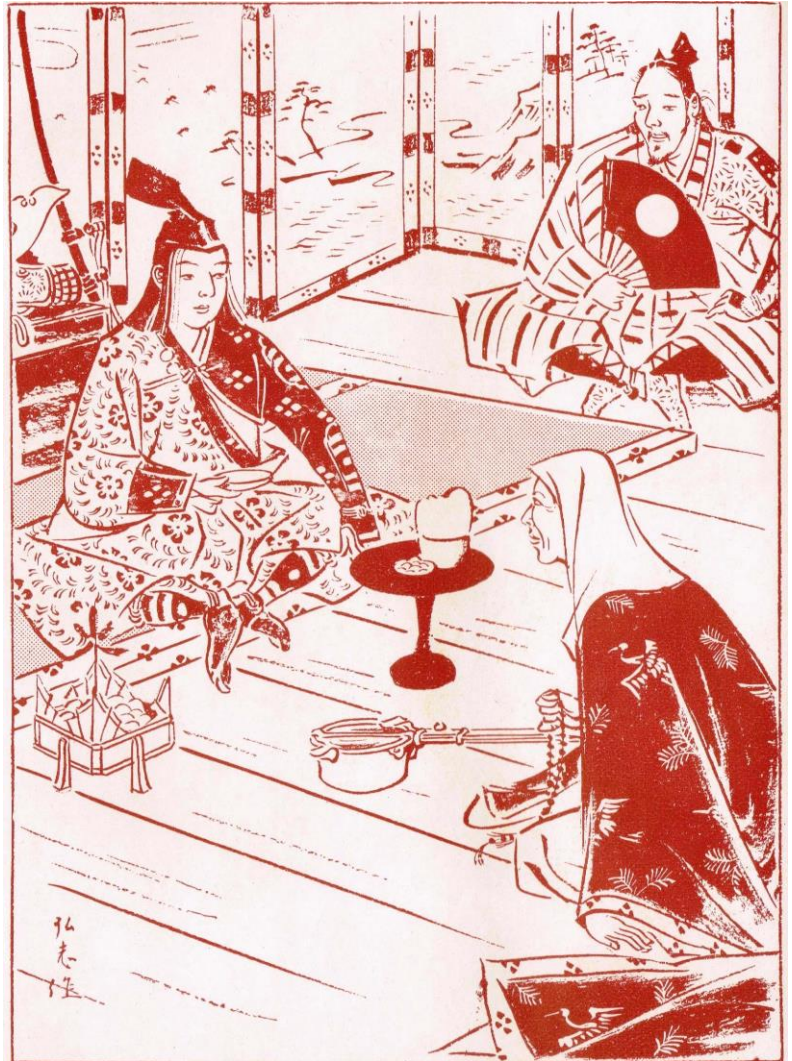
らの大軍に迎え撃たれ、さんざんに打負け、遂に保も義鑑も戦死した。

残った将士は辛くも柚山に引き返したが、討ち死にした者や負傷した者が非常に多かったので、これを歎き悲しむ声が城中に満ちた。

瓜生保の母

ところが、保の老母は少しも悲しげな様子も見せずに、脇屋義治の前に参って、「今度、敦賀に向った者共の力が足らずに、目的を達することの出来なかったのは、さぞ残念にお思いでしょう。

ただ、わたくしとしましては、二人の子の討ち死にしたのがせめてもの申し訳になるような気がします。まだ3人の子が生き残って居りますから、これからのお役に立ちましょう。



愁いを隠して元気をつける瓜生保の母

もともと朝廷の御為に義兵に加わったのでございますから、子供や甥が幾人討たれたとても歎くべきではありません」といって、自分で酌を取って義治に酒を宥めたので、元気を失った軍勢も、歎き悲しんでいる者共も憂いを忘れて勇み立ったという事です。女とはいえ男子にも及ばぬ立派な心懸けで、今も日本の女子の鑑として語り伝えられています。なお、瓜生保は、大正4年11月に、その忠功を追賞され、従四位を贈られました。

金崎城の苦戦

さて金崎の城では、柚山の援兵を一日千秋の思いでいたのに、瓜生の軍が敗れて引き返したと聞くと、今は頼むところも全くなくなりはてて心細くなって来た。既に3月以上も籠城しているのに、日に日に兵糧も乏しくなって来る。海の魚を釣って食べ、あるいは磯菜を摘んで食べてもいたが、今は軍馬を殺して朝晩の食に当てるといふ有様になって来た。この上は、いかにしても援兵を柚山に求めなければ、逆も10日とは持ちこたえることも出来まいと思われたので、ある夜、義貞、義助ら7人の者は、窃かに城を脱出して柚山に向った。柚山の城中では大いに喜び、今一度金崎へ向ってこの前

第17話 新田義貞と北畠顕家

はじ そそ うら むく いさ じゅんび と そまやま
の恥をも雪ぎ、恨みをも報いてくれんと、勇んでその準備にと取りかかったのです。しかし彼らが柚山
を立たないうちに、賊軍は早くも金崎の城中に全く糧食の尽きたのを見て取って、急に迫って八方か
ら総攻撃を開始しました。

城兵の困憊

ところが、金崎の城兵は馬をもすでに食い盡して、全く食事を絶って10日ばかりになった時でしたので、敵を防がなが為にとよろよろと木戸の辺までは出て行ったが、太刀を使う力もなければ弓を引く気力も無い。ただ徒に櫓の上に登り、堀の蔭に集まって、太息をついているばかりでした。

新田義貞

よしさだ わきやよしすけ る す あづ よしあき かくご さだ ま こうたいしつね
新田義貞、脇屋義助らの留守を預かっていた新田義貞は今はこれまでと覚悟を定めて、先づ皇太子恒
良親王を小船に乗せ申して、お供に氣比大宮司氏治の子の齊晴をつけて逃がし申した。更に尊良親王
の前に参って、「既に落城も近づきましたので、わたくし共は自害いたしますが、殿下は、たとえ敵の中に
おいでになりましても、よもや失い奉るような事はあるまいと存じます。ただこのままにしていらっ
しゃいませ」と申し上げた。親王はいつもより心地よげに笑わせられて、「主上が京都にお還りの時に、
われを以って汝らの主将として遣わせられたのであるから、生死はもとより共にする覚悟であるぞ。
しかし自害をば、いかようにすればよいのか？」と仰せられた。

尊良親王

よしあき かんるい お いた もう さかて と なお
義貞は感涙を押さえて、「かように致すのでございます」と申しもはず、刀を抜いて逆手に取り直し、
わき つ た わき ろっこつ か やぶ さ お うつぶ
左の脇に突き立て、右の脇の肋骨へとかけて掻き破り、其の刀を抜いて、親王の前に差し置いて、俯伏せ
になって死んだ。親王はやがて刀を取り上げてご覧になると、柄口に血が余ってすべるので、お召物の
そで かたな え ま じがい かつ ごだいご おき せんこう
袖で刀の柄をきりきりとお巻きになって、ついにご自害なされた。嘗て後醍醐天皇が隠岐へご遷幸の
ろくじょうただあき とも いちじょうゆきふさ け ひ だいごう じ うじはる
時に、六條忠顕とただ2人でお供をした一條行房も、氣比の大宮司の氏治らと共に、この時、親王の
お供をして腹を切った。つづいて城兵の300余人も互いに指し違えて死んだ。時に永元2年3月6日
でした。

氣比齊晴

つねなが なりはる すいれん たつじん
皇太子恒良親王のお供に立った氣比齊晴は、もともと力も人にすぐれ、水練の達人でもあったので、
皇太子を小船にお乗せして、櫓も櫂もなかったが、綱手を自分の体に結いつけて、約3kmの海上を泳いで
かぶらぎのうら ところ つ だれ ひそ そまやま い
蕪木浦という処に着いた。これを知る者は誰もいなかったもので、潜かに柚山城にお入れ申すこともむ
づかしくはなかつたろうに、尊良親王を始めとして城中の人々が残らず自害するのに、自分一人が逃げ
て助かったならば、卑怯者と笑われようかと思ったので、皇太子をその浦の者の家にお預け申して、「こ
のお方は、後日天皇になられるべきお方であるぞ。いかにしても柚山城にお入れ申してくれよ」と言い含
めて、自分はまたもとの海上を泳ぎ帰って、城に入って自殺しました。

第17話 新田義貞と北畠顯家

皇太子が義貞らを庇う

その夜、斯波高経は金崎城で討ち死にした者や自害した者の首を実験したが、新田義貞、脇屋義助の首がない。さてはその辺の海にでも沈めたのではないかと、海女を入れて探らせたけれども見当たらない。不思議に思っていると、その翌日、蕪木浦に皇太子がおいででの由の知らせが来たので、急いでお迎えを出してお連れ申して、御前に高経が参って、義貞、義助の2人の死骸の事をお尋ねした。皇太子は幼いお心にも、2人が柚山城にいと敵に知らせては悪かろうと思われたのか、義貞、義助の2人はきのう暮れ方に自害したのを、部下の者らが火葬にするとか言っていたといわれた。それなら死骸のないのも尤もだとして、高経は安心して皇太子を京都にお送りした。

尊氏の無道

足利尊氏は、皇太子がお着きになると、御弟の成良親王とご一緒に花山院に押籠めた。ところが、翌年の4月、新田義貞、脇屋義助らが柚山城から打って出て、しきりに賊の城を攻め落として、大いに勢いを振るったので、尊氏は大いに怒り、去年皇太子に、金崎で義貞らが死んだといわれたの信じたりばかりにこの不覚を取ったのだと、ひそかに毒薬を進めて、ついに2親王を共に殺した。咄、逆賊尊氏、何という無道であろう。時に皇太子は15才、成良親王は13才でした。今、敦賀に在る官幣中社金崎宮は、皇太子恒良親王及び先に金崎でお薨れになった尊良親王を祀った社です。

奥州の北畠顯家

これより先き、北畠顯家は、尊氏を京都で破って九州に走らせた後、延元元年3月、再び義良親王を奉じて奥州に下っていた。その2ヶ月後の5月に、京都は再び尊氏に占領されて、その年の暮れには後醍醐天皇が潜かに吉野に遷られたために、新田義貞は遥か北国から使いを送って援けを求め、天皇もまた勅書を賜わって顯家に京都の回復を命ぜられた。しかしそのころ、陸奥にも敵軍が盛んでしたので、顯家は先づその地方の賊徒を討ち平らげてから、延元2年9月に、結城宗広、伊達行朝ら共に義良親王を奉じて岩代国の靈山城を出発した。途中、官軍に應ずる者が非常に多く、程なく100,000余騎の大軍となった。

一方、鎌倉を守っていた尊氏の子の義詮はこれを聞いて、80,000余騎の兵を出して利根川で防がせたが、官軍は苦もなくこれを破って、進んで鎌倉に迫った。

新田義興と北條時行

この時、新田義貞の子の義興も上野国に起こって顯家に応じ、又、先に尊氏に鎌倉と追い落とされた北條時行 — 最後の執権高時の子 — も、その後、諸国を流浪してから吉野の朝廷に使いを以ってお赦しを願って官軍方になっていたが、この時に伊豆に起こって顯家に応じた。延元2年12月、顯家はこれらの人々と共に鎌倉を攻めて足利義詮らを走らすと、翌3年正月、鎌倉を出発して京都に向った。

顯家、前後に敵を受ける

第17話 新田義貞と北畠顯家

ところが義詮の部下の諸将は、一旦鎌倉から諸方へ逃げ散っていたが、顯家が出発すると直ぐにまた鎌倉に入って、近国の賊兵を集めて、その勢 80,000 余騎で、官軍の跡を追いつつ、東海道を西上して顯家を討とうとした。顯家は美濃の青野原で取って還してこれを大いに破ったが、この時、尊氏が京都から遣わせた高師泰、師冬らの賊軍に、その行手を固く拒ぎ止められたので、この前後の敵に次第に圧迫されてついに進むことが出来なくなり、路を伊勢路に転じて伊賀から奈良へまわった。

2月下旬、顯家らは奈良で勢力を回復すると、一気に京都に攻上ろうとした。しかし、この時もあった、賊の大群に奈良の般若坂で却って大いに破られたので、顯家は密かに義良親王を吉野にお送りして、自分は河内に遁れました。

石川河原の戦

けれども、京都に攻め上って朝敵を追い落とそうとの北畠顯家の心は、一時も止まなかった。それで、河内に在って敗軍を整え、3月8日、自ら攝津の天王寺に進んで、先づこれを占領しようとして、遂に敵を破って軍を進めた。天王寺の守将細川顯氏はこれを聞くと、先んじて迎え撃とうと、南河内の石川河原まで兵を進めて来た。ところが、却って顯家に破られて追撃されたので、あわてて京都に逃げ帰った。

尊氏は大いに驚き、高師直、師冬以下の諸将を遣わしてこれを食い止めさせようとしたが、この時、顯家の軍はすでに進んで天王寺に入り、弟の顯信は更に進んで山城の男山八幡宮に陣を取っていた。賊軍は先づ力を尽して男山の城を攻めさせたが、要害堅固な城に勤王の志の堅固な者共が立籠っているのです、中々破ることが出来ない。

安部野の戦

ついに師直は計略を変えて、先づ大兵を以って男山を包囲させて、官軍を城から打って出られぬようにして置いて、自分は主力を率いて顯家を天王寺に攻めた。3月15日に激戦が行われたが、その翌16日に、細川顯氏が高師冬らと共に天王寺の南方の安部野に進んで、師直と共に顯家を挟撃したので、遂に官軍は敗れて退き、従って天王寺も陥った。

石津の戦、顯家の戦死

しかし、顯家は、5月に入ると再びまた軍を率いて和泉の堺浦に現れた。男山では弟の顯信がなおよく守って防戦していたので、顯家は大いにこれに氣勢を添えようとしたのだが、高師直、師冬以下の諸将の援けを得て攻め寄せて来た賊軍と戦い、延元3年5月22日、北畠顯家はついに和泉の石津で戦死した。時に年は21才でした。弟の顯信はその後もなおよく男山を守ってしばしば賊の大軍を破ったが、7月に至って、高師直らが火を八幡宮の神殿に放ってこれを焼いたので、遂に城は陥り、顯家らは河内に遁れた。

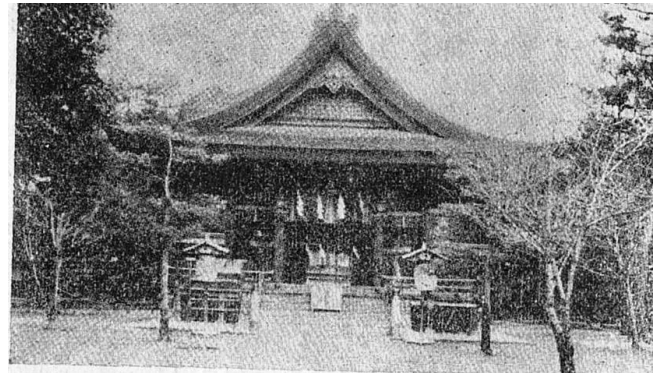
(62) 村上^{むらかみ}天皇^{みこと}—基平^{もとひら}親王^{みなもともろふさ}—源^{みなもと}師房^{しむら} — (この間六代略) — 北畠^{きたばたけ}雅家^{まさけ}—師親^{もろちか}—師重^{もろしげ}—親房^{ちかふさ}

あきいえ
顕家
あきのぶ
顕信
あきよし
顕能

(中院貞平の子)

あきいえ せんこう
顕家の戦功

元^{がんらい}来^{きた}、北^{きた}畠^{ばたけ}氏^しは村^{むらかみ}上^{げんじ}源^{げん}氏^しであり、武^ぶ臣^{しん}の家^{いえ}で
はなかつたが、顕^{あき}家^{いえ}は、殊^{こと}に武^ぶ略^{りやく}に優^{すぐ}れた勇^{ゆう}将^{しょう}で
あつて、年^{とし}若^{わか}くして鎮^{ちん}守^{じゆ}府^ふ将^{しょう}軍^{ぐん}に任^{にん}ざれ、奥^{おう}州^{しゅう}
で大^{たい}軍^{ぐん}を2度^どまでも起^おこして、1度^たは足^{たか}利^{うじ}尊^{すん}氏^しを
九^お州^くへ追^お下^{くだ}し、天^み皇^{こう}の御^ご心^{しん}を快^{やす}く休^ため奉^{まつ}りさ
えしたのに、今^{かん}、官^{くわん}軍^{ぐん}の将^{しょう}士^しの乏^{とほ}しい折^{おり}に、



あべの
大阪 阿倍野区 北畠 安部野神社

またまたこの勇^{ゆう}将^{しょう}を失^{うしな}つたのですから、吉^{よし}野^のの朝^{ちやう}廷^{てい}が力^{ちから}を落^おとされた事は非常^{ひじょう}なものでした。

天^{てん}皇^{こう}は大^{だい}いにその死^しを悼^{たう}まれて、特^{とく}にその勲^{くん}功^{こう}を追^{つい}賞^{しょう}して従^{じゆん}一^{いつ}位^い右^う大^{だい}臣^{しん}を贈^{くわ}られた。今^{いま}、大阪^お市^し
の南^{なん}方^{ぽう}に在^ある安^あ部^べ野^の神^{じん}社^{じゃ}は、顕^あ家^{いえ}及^あびその父^{ちち}の親^{ちか}房^{ふさ}を祀^{まつ}り、岩^{いわ}代^{しろ}(福^ふ島^{しま}県^{けん})の伊^い達^だ郡^{ぐん}に在^ある霊^{れい}山^{ざん}神^{じん}社^{じゃ}は、
親^{ちか}房^{ふさ}、顕^あ家^{いえ}、顕^あ信^{しん}及^あび顕^あ信^{しん}の子^この守^{まも}親^{ちか}を祀^{まつ}つたもので、共^{とも}に別^{べつ}格^{かく}官^{くわん}幣^{へい}社^{しゃ}に列^{れつ}せられている。

そまやま よしさだ
柚山城の新田義貞

さて、新^に田^た義^{よし}貞^{さだ}はそのこころ柚^ゆ山^{ざん}城^{じやう}にいた。彼^{かれ}は去^か年^{ねん}の3月^{げつ}、金^{かね}崎^{さき}城^{じやう}を救^{すく}うことが出来^{でき}なかつたの
を非^ひ常^{じょう}に残^{のこ}念^{ねん}に思^{おも}っていたが、既^{すで}に城^{じやう}が陥^{おち}つてしまつた後^{のち}の事^{こと}ですから、これ^{これ}はど^どうし^しようもなかつた。
それ^{それ}で、その後^{のち}は柚^ゆ山^{ざん}城^{じやう}に在^あつて、弟^あの義^{よし}助^{すけ}と共^{とも}に先^まづ義^ぎ兵^{へい}を集^{あつ}めることに心^{こころ}を砕^{くだ}いていた。半^{はん}年^{ねん}ばか
りも経^たつと、漸^{よう}く3,000騎^きの身^み方^{かた}を得^えたので、これ^{これ}より次^{しだい}第^だに賊^{ぞく}の諸^{しよ}城^{じやう}を下^{くだ}して、官^{くわん}軍^{ぐん}の勢^{せい}いがまた盛^{さか}
んになつて来^きた。

よしさだ こくふ せんりやう
義貞、国府を占領

この事^{こと}を聞^きいた尊^{たか}氏^{うじ}が大^{だい}いに怒^{いか}つて皇^{つね}太^な子^な恒^し良^ら親^{しん}王^{わう}を殺^{ころ}したことは前^{まへ}に述^のべたが、それ^{それ}と同^{どう}時^じに、彼^{かれ}
は越^え前^{ぜん}の守^{しゆ}護^ご斯^{しば}波^{たか}高^{つね}経^ねに命^{めい}じて義^{よし}貞^{さだ}らを攻^せめさせた。けれど、義^{よし}貞^{さだ}は加^か賀^が方^{ほう}面^{めん}の援^{えん}兵^{べい}をも得^えて頻^{しき}
りに賊^{ぞく}軍^{ぐん}を破^{たか}り、高^{たか}経^{つね}の国^{こく}府^ふ — 今^{いま}の福^{たけ}井^ふ県^{けん} 武^{たけ}生^ふ — の城^{じやう}に迫^{へい}つた時^じには、越^{へい}前^{ぜん}の平^{へい}泉^{せん}寺^じの僧^{そう}兵^{べい}らも来^きて援^{えん}
けたので、官^{くわん}軍^{ぐん}の勢^{せい}いは大^{だい}いに振^{ふる}い、ついに高^{たか}経^{つね}を足^あ羽^わに追^おい落^おとして国^{せん}府^{りやう}を占^{せん}領^{りやう}した。

高^{たか}経^{つね}が退^あ却^{すわ}した足^あ羽^わというの^のは、今^{いま}の福^ふ井^{きん}市^{しやう}附^ふ近^{きん}の総^{そう}称^{しやう}で、越^え前^{ぜん}の国^{こく}府^ふの北^{へい}方^{ぽう}約^{やく} 20 km のとこ
ろに当^{あた}る。高^{たか}経^{つね}はこの足^あ羽^わの城^{じやう}に残^{ざん}兵^{べい}を集^あめて、附^と近^りに7つの砦^{きづ}を築^よいて、義^{よし}貞^{さだ}の軍^{ぐん}と相^あ対^{たい}したが、高^{たか}
経^{つね}の勢^{せい}いはすでに頗^{すこ}る衰^おえていた。

よしすけ おとこやまきやうえん
義助の男山救援

第17話 新田義貞と北畠顯家

時は延元3年7月、北畠顯家は既に和泉の石津に戦死し、弟の顯信らは男山の八幡宮で最後の決戦を試みようとしていた頃の事です。後醍醐天皇は、北国の官軍が再び勢力を得て来た事をお聞きになって大いに喜ばれ、特に義貞に勅りして、男山の顯信を援けて京都の回復を図らせられた。

それで、義貞は先づ弟の義助をして大兵を率いて京都へ向わせたが、途中まで行った時に、男山は既に陥って顯信は河内へ遁れた事が分かったので、義助は引返した。義貞は、今は先づ北国を全く平らげて後に京都には攻め上ることにしようと思い、そこで義助と共に高経を足羽城に攻めた。

藤島砦の戦

ところがこの時になって、平泉寺の僧徒らが高経の為に利を以って誘われて、俄かに賊軍に荷担したので官軍の作戦が齟齬した。その上に、その僧兵らの立籠もった藤島砦に向った身方が、敵の小勢力を侮って、むやみに攻めかかったので、苦戦に陥り、やゝもすれば追い立てられそうな様子になった。

義貞はこれを見て不安に思ったのか、自ら50騎を率いて、間道から田の畦伝いに藤島砦に向った。その途中で、高経が藤島砦へ加勢に向けた300余騎の賊兵と出逢って、忽ちさんざんに射られたが、身方には射手の1人もいなく、楯の1帖も持っていなかったため、前の兵が義貞の矢面に立ち塞がって、ただ的になって射られていた。

新田義貞の戦死

家来は義貞に遁れる事を勧めたが、部下を失ってひとり遁れるのは我が意ではないとして、義貞はなお敵の中へ駆け入らんと、馬に一鞭あてた。けれども馬は既に5筋までも射立てられた矢に弱っていたので、忽ち屏風を倒すが如くに深田の中に転んだので、義貞は左の足を馬に敷かれて、起き上がろうとするころへ、白羽の矢が飛んで来て眉間の真ん中に立った。急所の痛手であるので、今は逆も叶わぬと思ったのか、抜いた太刀を左手に取り渡して、自ら首を掻き切って死んだ。時に延元3年閏7月2日、年は38才でした。その墓は、福井市の北方凡そ120kmの所に在ります。

義貞の功績

尊氏が謀反を起こして以来、新田義貞は常に尊氏の正面の強敵となつて、各地に奮戦苦闘とつづけたが、その作戦が1つも成功せず、而も大した合戦でもないところで、犬死にも似た無慙な最期を遂げたのですから、その心中を想うと、さぞ残念だったでしょう。しかし、彼が官軍の総大将



福井

藤島神社

となって、常によく逆賊の大軍に対抗したのでこそ、後醍醐天皇はどこまでも正統の皇位を保たれて、政権ご回復のお志も弛めなかつたと見られるので、その功績は非常に大きいのであります。

後、明治天皇はその勲功を追賞されて、義貞に正一位を贈られた。今、福井市の足羽山に在る別格

第17話 新田義貞と北畠顕家

かんべいしゃ ふじしまじんじや よしさだ まつ やしろ
官幣社 藤島神社は義貞を祀る社です。

その後の脇屋義助

よしさだ せんし わきやよしすけ おお ふ
義貞の戦死の後には、弟の脇屋義助が北国の官軍を率いて、一時は大いに振るったこともありますが、
後には次第に賊軍に圧迫されて、遂に北国から追い落とされた。

つい よしすけ か そ あしかがぜい
序でに、義助のその後の事もここに書き添えます。―― 彼は足利勢に北国を追い落とされると、美濃に入
ね お きづ たてこ と きよりとお
って、根尾山に城を築いて立籠もったが、間もなく賊将土岐頼遠に攻め落とされて、尾張から伊勢
ごむらかみ あんぐう まい おり しょうどしま きん
に出て、後村上天皇の興国3年に吉野の行宮（訳注：仮の皇居）に参った。折から四国の小豆島に勤
のう あ あくらののぶたね くだ たま こ よしすけ
王の兵を挙げた飽浦信胤が、しかるべき大将を下し給わるとお願い奉ったので、朝廷では義助を四国、
さいごく にん くだ
西国の大将に任ぜられてお下しになった。

よしすけ みことのり ほう こじま もよお
興国3年4月1日、義助は勅を奉じて、紀州から海路を備前の児島に渡り、各地の官軍を催し
いよ いまばり おおだてうじあきら
て伊予の今治に着いた。そのころ、伊予の守護は新田氏一族の大館氏明であり、国司は同じく吉野方
しじょうありすけ どい とくのう よしすけ いせい
の四條有資であった上に、ここは官軍の土居、得能氏らの本国でしたから、義助が着くと共に、官軍の威勢
たちま ことごと どういつ よしすけ
は大いに振るって、忽ち四国は悉く統一されそうにさえ見えました。ところが、義助はその5月に
にわ やまい かか こくふ まった ふ
俄かに病に罹って国府で亡くなり、四国の官軍もそれからはまた全く振るわなくなっていました。

足利尊氏、幕府を京都に開く

さき きたばたけあきいえ せんし につた よしさだ おとろ たかうじ
さて、曩に北畠顕家が戦死し、今また新田義貞が死んで、官軍の勢いが大いに衰えると、足利尊氏
はいよいよ天下を取った気になったのでしょうか。この年、即ち延元3年（西暦1338年）の8月、北朝
こうみょういん せいたいしやうぐん にん もっと おこな
の光明院から征夷大將軍に任ぜられて、幕府を京都に開いた。尤も、彼がほしいままに政治を行っ
たのは、すでに光明院をお立てした延元元年からの事なのですが、今度、征夷大將軍になって、始めて幕
ふ かたち ととの にんめい せいとう よしの ちやうてい
府の形を整えたのです。けれども、この將軍の任命も、正統の吉野の朝廷から出たのではないので、
いうまでもなく、尊氏は正統な將軍ではありません。

（第17話 新田義貞と北畠顕家 終わり。次は前頁に戻り、第18話 北畠親房の東国経営へ）